



著者近影

テレビが誕生し
番組制作が
一番楽しい時代に

私の放送人生

第19回

元北海道放送 (HBC)

佐々木 俊幸 氏

北海道放送時代

昭和32年(1957年)3月放送界に入る。4月1日北海道放送(HBC)がテレビ開局。

開局記念番組でカメラマン・デビュー。右も左も分からない状態でカメラマンに。「昨日までハンダゴテを握り、ラジオを作ったり、発電所、送電線やオームの法則を勉強していた私がなぜカメラマンに」と尋ねると、「放送機器は真空管を使い回路も複雑。カメラが故障した場合にその症状から判断してすぐ修理が可能なため」との答え。確かにインストラクションも横文字で、辞書にとらめつこで毎日毎日修理をしていた。それでも毎日がとても楽しかった。現在もカメラマンが技術系なのかは、何故か分からない。

HBCはNHK札幌から4カ月遅れて開局した。その際、電波の送信所を山の頂上に設置するマウンテン・



手稲送信所

トップ方式を日本で初めて採用したのは、サービスエリアを広くするために、手稲山頂(1023m)に送信所を作り、高さ60mのアンテナから第1チャンネルで放送。手稲山頂まで、道なき道を作り、電気と水を確保。その創造力は思いのほか大変だった。決断者は阿部謙夫社長と杉山達郎技術トップ。一方NHK札幌は市内の大通公園にテレビ塔を建てた。その後開局した民放各局も、現在はNHKも手稲山頂から放送している。

その杉山氏からいただいた言葉は3U。「勇気」「友情」「ユーモア」。勇気を持って発言・行動する、友情・チームワーク、ユーモア・余裕。

何事も準備を重ね、携わる事で、余裕が、そしてユーモアも生まれると私は理解している。

全てが生放送

舞台中継、邦楽邦舞、歌番組、全てが生放送だった。当時はカメラの感度も悪く照明が足りない。必ず追加照明が必要になる。したがって、ホール・スタッフとのコミニケーションが大切になり、舞台用語を覚えるのも一苦労だった。

スポーツ中継の苦労

スキー競技、アイスホッケー、野球などルールは分かりやすいが、困ったのがゴルフ。当時、コースも見たことがない、本を読んでも分からない。自分たちでプレイして覚えるしかない、皆でゴルフ場に足を運んだ。数回放送後、同伴者目線のカメラが欲しくなり、ティー・グラウンドにレールを引き(40kgの大型カメラのため)、ティー・アップの後ろに移動して撮影に成功した。

永六輔さんの思い出

NET(現テレビ朝日)のモーニングショーで、彼がリポーターをしていた頃のエピソード。牧場からの中継が終わり、本社に戻ると「NETに電話を入れるので10円玉に替えて欲しい」と彼が言い出した。「会社の電話を使つて下さい」と話したが「自分の問題なので自分が払う」と言う。当時、赤電話で北海道から5秒10円くらい。結局、彼に従うことに。真面目な方なのだと感心した。

KRTで研修

HBCはKRT(現TBS)の系列局なので、研修は10日間の日程でCAM・VE・照明などがKRTで行われた。特に照明は各番組のライティング・ディレクターさんから仕込み方とその実地を学び、美術は坂上さんから、ドラマのセット図面の引き方、和室・洋室の常識・庭との繋がり、などを数日にわたつて教わった。しかし、とても時間が足らず、その後1週間ずつ休みをとり、2回KRTにお邪魔

した。特にライティング・ディレクターさんの顔を沢山覚えたことが後々、独立した際に大変役に立つ事になる。

皇太子ご成婚中継

皇太子ご成婚の中継では、北海道から中継車を持ち込み、4台のカメラで青山エリアを担当。私はビル3Fの屋上より600mmのレンズでフォロー。テストの結果、最接近時は皇太子を撮る事になった。本当は美智子妃殿下をフォローしたかった。生放送オンリーの



ご成婚中継でカメラを構える筆者

時代、どのような中継になったのか記録がない。今考えると、生放送なので自分のやりたいように美智子妃殿下をフォローすれば良かったと反省している。



ご成婚中継

制作技術部で

製作技術部では、いろいろな番組に出会った。楽譜の読み方、邦楽だと楽器名、立唄、立三味線の位置、お茶は正客から末客まで。それぞれの用語、マナーなど覚えなければならぬ事が沢山ある。私はドラマが好きだ。当時、『近

鉄金曜劇場』『サンヨーテレビ劇場』『おかあさん』等、そして『東芝日曜劇場』。ここからは、思い出の作品を数本紹介したい。

東芝日曜劇場『わかれ』

出演：佐分利信、日下武史、林寛子(9歳) 脚本：長谷部慶次 演出：守分寿男。(昭和42年度芸術祭 文部大臣賞 受賞)

佐分利さん宅に行くと戦争体験の資料が沢山あった。でもその話はしない。庭に大きな柿の木があり良く実っていた。脚立に登って取ると、佐分利さんが「そこからの景色はどう？」と言う。「庭越しに俯瞰で縁側の男二人、頼もしいです」と答えると「俯瞰での撮影は効果的などころだけ使い、あまり使うな」と言われた。柿は美味しかった。

技術担当の私が、旅館で長谷部慶次氏が執筆しているところに遊びに行くと(私が佐々木俊幸なので)「トシ! 佐分利が、なぜか杖のような棒を持って歩いて来て、小川をザックと突く。シヤケが



東芝日曜劇場『わかれ』で、あたためていたアイディアを実現

跳ねる。こんなシーン撮れるか？」とか、三一致の法則Ⅱ「テーマ」「時間」「場所」の一致、について詳しく教わり、演劇用語だが、起承転結と同じように台本構成上、必要な事が沢山ある事など教わった。

ある撮影現場でのこと。畑での農作業のシーンだった。佐分利さんが突然「レンズはここ」と言う。

普通より少し高い位置。この場所は、美しい風景の中の畑仕事ではなく、監督は1本の朽ち果てた木があるので決めた場所。私は少し長いレンズで老人と朽ちた木を背中に入れ、ルーズショットに。北海道の美しいシーンにしくなかつた事で皆一致した。

この作品で私には、あたためていたアイディアがあつた。「お月様の中でウサギさんが、餅つきをしている」ように、沈む夕日の中に神秘的に人物を入れたかった。

当時の撮像管は真空管のイメージ・オルシコン。強い光を撮つてはいけない時代。また、VTRもテープの長回しは予算的に難しい…。そんなことを許す局にも感謝(不許可だったか

も?)。レンズは2000mm迄しか無く、足りないため画面を引き伸ばし、円くなるように調整して撮影した(今でいう電子ズームの原理)。現場は、小岩の上に天使の少女(林寛子)と日下武史、カメラは200m以上離れた場所に。太陽の沈む位置と岩の上の2人を合わせるため、20mのレール上でカメラ移動。岩とカメラの間の人ハゲがうまくいかなかったり、太陽が水平線近くに沈む前に雲に入るなどして3回トライ、つまり、3日挑戦して、ようやく成功した。太陽に人物が安定して入っている時間はほんの15秒くらいで、使用したのは7秒だったと記憶している。

『ムツクリを吹く女』

出演…木村功、大空真弓 脚本…谷川俊太郎 音楽…武満徹 演出…森岡逞次

シナリオ・ハンティングで、谷川・武満・森岡と私の4名で北海道内を1週間回った。作品の話はせず、世間話ばかりで、ロケ地に適した

場所に行くこと決まってバラバラの方向に行つてしまい、30分くらいで戻ってくる。温泉宿では武満さんとお風呂に入ったが他の方には会わなかった。アイヌの女性にムツクリ(アイヌの口琴)を吹いてもらった時、武満さんが耳を口に付ければ十分に長い時間、聞いていた。

ロケーションで、木村と大空の2人が湖畔の三角テントの中で朝を迎えるシーン。カメラは2人のシルエットの向こうに湖。これを写真用の100mmのレンズを使ってアイリス・インをした。普通ならフェード・インだが、レンズのアイリスをクローズから空けて行くと、湖畔の水が見え、次に砂にピント、だんだん砂浜が広がり、テントの中の2人のシルエットになる。ピントを移動しているわけでもズームを使っているわけでもない。このシーンに最適の効果になった。

木村功さんとは、この作品以外にも2本担当したが、終了後「太秦(京都)で撮影しているので、遊びに来ないか」と言うので1週間ほど行った。定宿は別室があり、

庭で専用のゴルフ練習ができるようになっていた。撮影現場では、カメラン・照明さん・太秦の所長さんを紹介していただき、独立後に大変役に立つ事になる。

『ダンプかあちゃん』

出演：長山藍子、緒方拳

長山藍子がダンプを運転するシーンで中継車を使った。助手席にハンドルを付け、長山さんが操作する。右にいる本物の運転手と同じ動きをしてもらう。2人の間にミラーを置き、それを撮影するとミラー効果で、右ハンドルの運転に見える。藍子ちゃん大喜び！



木村功さん(右)と

台本の書ききにはCupなどと書いてくる(クロージアップでという意味)。
そこは、駆け引きしながら作って行くのが、とても楽しい。倉本作品はテーマ

倉本 聡さんとのドラマ作り

札幌オリンピックが近い1972年の『風船のあがる時』から『聖夜』、そして『うちのホンカン』シリーズまで、私が北海道に居る間の作品は全部担当させて頂いた。倉本さんとは「楽しい、楽しい」ドラマ作りだった。脚本を書いているところは知らないが、ゴルフ練習場で10円賭けてワンオン練習をしたり。スタジオでは、スイッチングをしていると、ワンロール終わる毎に15枚程のカードから1枚を見せに来る。あらかじめ作ってきたカードには「良い出来」「新しい発見有」「普通の出来」「八千草・仁科、綺麗」等々と書いてある。また、



倉本聡さん(左)と

がはつきりしているので、台本を読めば読むほど理解できてくる。あとは自動的に作品が出来上がる。技術的にあまり枝葉を付けない方が良いと思い楽しんだ。

1975年東京に移る

北海道放送を退職し、東京に出ることは、皆さんに反対された。しかし、ドラマ作りのために決意。

日比谷スタジオ(元NHK)を拠点に、現(株)ビデオスタッフを設立し、主に東京以外の局制作番組担当。しかし、日比谷スタジオは地下鉄千代田線が開通して音の問題が発生。移転先は、渋谷の

ボウリング場を改装し、スタジオに。その設計に携わる事になる。従来、副調整室は2階にあり、スタジオ(以下ST)を見下ろす大きな窓があるが、新設する2STはその窓をやめた。すると、長期で使用する計画のNTVからクレーム。当時のST社長石井智氏とNHK、TBS、NTVの副調整室を見て廻り、窓はあるが使われてない事を説明。NTVを説得してもらい、決定した。

また、1STは副調整室を1階にした。もちろん窓は無いが、監督と俳優の距離が近くなることで大変便利になる。窓を作る予算でカメラ・ペダスタルと14倍のレンズを新調でき、渋谷ビデオスタジオは完成した。

仕切り直しになった連ドラ

当時、連ドラは6カ月間24話、ST48日・ロケ10日のスケジュールで制作していた。技術TD担当作品で、大原麗子主演、スタートは北海道ロケを予定。しかし、大原さんの体調がすぐれなかった。倉本さんから食事の折に「大原さんは諦めた方が良い」と言われた。翌日、大原さんが出て来ないので迎えに行くと、アルコールが残っている。4時間遅れでスタート。その後、いろいろな事が起き、5日間のロケを終え東京に戻るが、スタジオ撮影も大原さん体調不良で中止。結局、大原さんNG。代役オーディションから仕切り直しになった。

『亭主の家出』ロケで台風が

九州朝日放送から中継車を借りて、九州でのロケーション。台風が来ているが合間をみて撮ろうと現場へ行ったが、天候がひどくなり中止。その頃、市内にも被害が出始めたという情報が報道無線から聞こえてくる。本社に連絡し、

「(報道用の映像を)我々が撮ります」と伝えると運転手さんは地元の方なので現場へ。私達が取材し、本社に届け、九州朝日放送から感謝状を頂く。

『意地悪ばあさん』はスムーズ

青島幸男編19時から30分番組。「この予算で作れるか？」と相談を受けた。ドラマ作りは制作・美術・技術の3部門からなるが、予算配分は約50%・25%・25%となる。技術の25%の中には撮影スタジオ使用料が含まれる。1話ST1日、ロケ2日で15分7分7分を撮る。収録は9時〜21時の予定。STロール数、ロケ・カット数を制限する。スタジオはステージを改造した生田スタジオを使用(NTV系)。ロケは神奈川県百合ヶ丘(スタジオに近い)。基本、移動無し。以上の条件でスタート。青島さんは小田急線から来るので、お迎えから始まる。青島さん、台本は持っているが、殆ど頭に入っている。したがって他の皆さんも頭に入れて来る。ドライ(現場で

の立ち稽古)、カメラ・リハーサル、各1回で本番。スタジオも同じで、ドライの後、照明・美術等々の直し中にカメラ割り、そしてカメラハ、本番。撮影に入ってみると、とてもスムーズで、しかも早い。結果、内容も良く視聴率も段々良くなり、ビデオリサーチとニールセンが共に25%を超えた。この時は局から金一封が出て、スタジオで餅つきをして祝った。私もこの番組で「技術プロデューサー」というタイトルを頂く事になった。番組は後半、90分の単発になるが9年間続いた。



意地悪ばあさん集合写真

1986年、VASC設立

VASC(バスク)。ビデオ・アート・システム・コミュニケーションズ。ドラマ専用の制作技術会社だ。設立にあたり、皆さんに相談したところ、全員に「ドラマだけでは儲からないから、やめなさい」と言われた。しかし、ドラマ専用会社として、全てをコーディネートし、責任を持って制作する事で、営業は成り立つと考えた。私も局に居たとき、「社内のスタッフと作るのも良いが、外のスタッフ、あのカメラマンと仕事をしてみたい」等、オープンにスタッフ構成し、コーディネイトをする技術プロデューサーが居ても良いのではないかと考えていたこともあり、設立する事に。ベースの仕事は共同テレビジョンのドラマ班『意地悪ばあさん』を含む仕事ではじまる。設備はロケ機材一式。スタッフはカメラマン、VEデスクと私の4名。コーディネイト中心なので少数精鋭。それでも5年目には30名を超えた。人事管理上、30名までと考えていたが、番組本数が増え、「ポストプ

口部門も自社で」となり、10年目に70名、20年目には100名超えに。

当初から自分のスタジオを持ちたいと考えていたから、オールロケの連ドラ『女捜査官』で国際放映のステージ(映画用のスタジオ)を4カ月間単位で借りていたのを、「TVスタジオに出来ないか？」と国際放映さんと話し合い、照明とカメラ・音声設備・副調整室を作りTVスタジオに改造。同規模のSTより少し安い料金設定で月14日稼働の予定が20日以上稼働。大成功。これが、後に東京メディアシティとして7個のTVスタジオとなるスタートでは？

ポストプロ部門は、オフライン、オンライン編集、MAの設備を自社で行う。

単発番組では『御存知！鞍馬天狗』市川崑、『さよなら李香蘭』中国ロケ、ABC開局40周年『静寂の声』、名古屋テレビ30周年ドラマ番組、東海テレビ35周年『二人の母』等々、数多くの作品をいただいた。



カメラをのぞく市川崑監督

連ドラでは『ロングバケーション』『ナースのお仕事』『HERO』『シヨム』『WATER BOYS』等々、多くの作品に参加させて頂く事に。

田村正和さんとの楽しい時間

『過ぎし日のセレナーデ』(1989年)から始まり『ニューヨーク恋物語』『古畑任三郎』等々でのお付き合いとなる。

番組作りは「顔合わせ」から始まる。全員集合でプロデューサーの挨拶、キャスト、スタッフの紹介。次に本読み。正和さんは台本をテーブル上に置いてあるが見ない。相手の顔を見て本読みになる。古畑の場合、ゲストの皆さんはこの

段階で台本を見ながら下を向いているので犯人に見えてしまうかも。ただし、イチロー選手は本読みからセリフを覚えていた。唯一、正和さんと向かい合って本読みを続けた方だ。聞くとイチローさんはアメリカ大リーグにいながら『古畑任三郎』を全部ご覧になり、大ファンとのこと。

さて、正和さんは立ち稽古でスタジオに入ると本番終了までスタジオから出ない。もちろん台本は持ち込まない。いろんな意味で本番までのスピードが早くなり、撮影終了が深夜になった事はない。

古畑任三郎では、ゴルフ・コンペを数回行った。正和さんはスケジュール、時間に正確で、朝コースに行くときにインターチェンジで待っている、いつもの外車で現れる。料金所では左ハンドルなのでカードが取れない。係員が持つて来るまで待つ。後ろに数台並んでいるので係員は急いで持つて来る。料金所を出るときも同じ。コースでの正和さんはドライバー180ヤードくらいの飛距離。アイアンは

あまり飛ばさないが正確で、グロス90前後でラウンドする。ドラコン・ホールは、同伴したADが、正和さんがフェアウェイをキープしたホールに決める。順位はホールアウト後、新ペリア方式で決まるが、先のADがペリアホールを決めるので正和さんが優勝する。優勝カップには、あらかじめ「優勝・田村正和」と刻印してある。本人はそれを不思議とは思わない。そんなところが正和さんらしい。



『古畑任三郎』集合写真

また、番組の打ち上げでお話ししても、とても楽しい。楽しい時間を沢山頂き、ありがとうございました。

バスクとCX湾岸スタジオ

その後、バスクはポストプロ部門設備が膨らみ、スタッフも増え、事務所を移転することになった。仕事上、ロケーションが多く、スタッフは会社から現場へ早朝出発となる。そこで、各社員の住まいから通勤に一番便利な場所を考え、新宿に本社を置くことにした。ポストプロ部門も新宿が便利。ポストプロ部門、仕上げセンターも先駆けてデジタル化にトライ。また、合成加工作業がドラマにも導入され、長野オリピックで使用したインフェルノと言う合成マシンを使用するため、監督たちが長野まで行くことが多くなったので、高価ではあるが我が社でも導入する事となる(1999年)。この頃から技術の進化が激しくなる。4:3の画面から13:9、次に16:9に。HDになり、リニアからノン

リニアに、テープからハードディスクに。そのハードディスク容量もギガバイトからテラバイト(TB)になり、テラ数も急速に増える。2003年には我が社も9TBとなる。『ナースのお仕事ザ・ムービー』から、映画の作品も始まった。

その頃CXは台場に移っており、新しく湾岸スタジオを作る計画が。撮影スタジオを、情報バラエティ用に4個、ドラマ専用4個作るということ、ドラマ専用スタジオ設計のお手伝いをする事となった。200坪2個、300坪2個と規模は大きい、私得意の副調整室はスタジオと同フロアに。また、ホリゾント不要の案を出す。ローホリを掘らない事で新ビルのフロア1階分は少なくなり、照明電力の容量も少なくなる(受電契約の容量減)。

ポストプロ部門は、ビル内に置く。当時のバスクのポストプロ部門と同じシステムにしたいと考えた。まず、巨大サーバーを置き、スタジオ収録は直接サーバーに入力、ロケーションは素材を持ち込み、

サーバーにダビング入力。その全体系量は、週5〜6本の連ドラと、数本の単発が2クール分必要だ。195TB。大容量でアビッド社でも初めての事なので、サーバー管理とバックアップも含めた運用をどうするか。ボストンのアビッド社へスタッフが赴き、編集実験を重ねた。日本の編集は細かく、打ち込みの速度が早い。するとエラーが起きる。だが、改善を重ね、なんとか2007年に完成する。

一方、バスクはCXの売り上げが多くなり、上場社のCXとしては、よろしくないでバスクを買い取りたいとの相談がある。私にとつては、純資産額の増加により自社株価が上がり、個人では持て余していた時期だったので、早速お願いする事になる。

フジサンケイグループの一員となるも、他社・他局との仕事は、今までと変わらず営業。

2006年、バスク20周年に、フジテレビ村上光一社長(当時)からご挨拶を頂いた。「佐々木社長の魅力的なキャラクターでここま

で引つ張ってこられた。フジテレビのドラマの70%はバスクのお世話になっている。新しいスタジオでもポストプロの面で協力を頂いている。大いに業績を伸ばされ、グループの連結決算にも貢献をお願いしたい」との身に余る言葉だった。



バスク20周年パーティで、村上社長(右)と筆者

ドラマ人生

私のドラマ人生は、楽しく、技術全体の責任を持って作り上げた。カメラ・照明・音声・編集などのスタッフは、他の制作・美術などのスタッフに喜んで頂ける編成と準備を行い、また、使用する機



第2回東名阪ゴルフ大会で優勝

民放クラブと私

「路上観察の会」には妻と参加させて頂き、楽しんでいる。「ゴルフの会」では1996年八幡CCが初参加、2010年頃から本格的

楽しく、満足ゆく時間だった。

材・使用スタジオ・収録テープなど一切の用意と管理をする。スタジオやロケ現場での事故対応など大変なこともあったが、技術プロデュースを御旗に、素晴らしい人たちにめぐりあい、囲まれて、業務も順調に推移し、バスク25期。北海道からだとは半世紀を超え、

関東民放クラブの大会では2011年姉ヶ崎CCから2024年川越CCまで7回も優勝させていた

たき、ラッキーな大会になっている。まだ87歳。体調と相談しながら参加させて頂きまますのでよろしくお願い致します。

最近の私は、自慢の孫(ドイツ留学中)に家族で会いに行き、「プラハの春 音楽祭」で孫・佐々木つくしリサイタルを鑑賞。その後、チエで観光。



2025年、孫とプラハで

また、府中CCゴルフ競技シルバー杯で優勝とエイジ・シュートを達成するなど、ゴルフに熱中している。



府中CCで達成したエイジ・シュートの記念楯

佐々木 俊幸 略歴

(ささき・としゆき)

1938年生まれ 北海道出身

1957年3月

北海道放送(株)

テレビ制作技術部入社

1975年5月

北海道放送(株)退社

同年6月

(株)日比谷スタジオ技術部入社

同年7月

(株)日比谷スタッフ設立

同社取締役 就任

1977年2月

(株)ビデオスタッフに社名変更

1982年10月

同社取締役 退任

同年11月

(株)ビック取締役 就任

1986年10月

同 退任

同年11月

(株)バスク設立

同社代表取締役社長 就任

2005年4月

(株)バスク、フジサンケイグループに参入

2009年6月

(株)バスク社長 退任

同社代表取締役相談役 就任

2010年6月

同 退任